

一八八三年七月二十二日(日)

ドツキネーシヨル
南神村のカーリー神殿において信者たちを相手にブラフマンの原理と根元
シヤクテイ
造化力についての対話——ヴィディヤサーガルとケーシヤブ・センのこと

智慧のヨーガとニルヴァーナ

学者パドマローチャンとイーシュワラ・チャンドラ・ヴィディヤサーガル

アシャルの黒分三日目。英国式にはキリスト暦一八八三年七月二十二日。今日は日曜なので、信者達は大聖大覚者様にお会いするためにあちこちから来ていた。週日には彼等は殆ど来られないのである。日曜日にはみんな暇が取れるのだ。アダル、ラカール、校長の三人がカルカッタから同じ馬車に乗ってここへ着いたのは、午後一時から二時の間であった。タクール、聖ラーマクリシュナは食後の休息をすまされたところだった。部屋にはマニ・マリツクと、ほか数人の信者が坐っている。

ラースマニの広大なカーリー寺院の東方に、聖ラーダーカーンタ堂と聖バヴァタリニー堂(カーリー堂)がある。西の方には十二のシヴァ堂。並んでいるシヴァ堂の真北にあたる場所が大聖大覚者様のお部屋である。部屋の西側に半円形のベランダがあって、そこにいつもタクールは西向きにお立ちに

なってガンジスの流れを眺めていらつしやる。ガンジスの堤防とペランダの間にある地域は、神殿の花園である。この花園は実に広い。南は大庭園の端まで、北は五聖樹パンチャパテイの杜もりまで広がっている。この杜で、タクール、聖ラーマクリシュナは苦行をなさった。また東は、境内の二つの出入口のところまでつづいている。大覚者様のお部屋のそばには、二株ほどのクリシュナチユラチユラの樹が真紅の花を咲かせている。その近くにクチナシ、コーキラークシヤオキノツメ、白と赤の夾竹桃キョウチクトウがある。部屋の壁には神々の絵が掛けてあり、そのなかに、水に溺れるペテロの手をつかんで救うイエスの絵もある。仏陀様の石像も飾かざってある。ベッドの上にタクールは北を向いてお坐りになり、信者たちは床に敷いた敷物の上に坐っている。誰も彼もみな、この霊的偉人の喜びに満ちた姿に視線を集中している。部屋から程遠からぬ堤防の向こうには、聖なる水ガンジスが南に向かって流れている。雨期なので、水かさを増した強い流れがベンガル湾に急いでいる。途中、偉大な聖者が瞑想するお部屋を一目見て、そこにお触れしたあと、流れているようである。

マニ・マリツク氏はプラフマ協会の古い会員である。年齢としは六十を少しこえたところ。彼は数日前、聖地カーシー(ベナレス)に詣つて帰ってきたばかりである。今日はタクールにお会いして、その旅行についてこまごまと報告しているところだ。

マニ・マリツク「それから、或る修行者に会いましたが、この人はこう言うのです。感覚器官を支配できなければどうにもならない。神よ、神よ、と言っているだけでは何ごとも成就しない、と」

聖ラーマクリシュナ「そういう人たちの考え方を知っているかい？ 先ず、修行(サーダナ)が必要な

んだよ。心の平静(シヤーマ)と感覚の統御(ダーマ)、そして忍耐(ティティクシヤ)を実行するんだ。あの人たちはニルヴァーナに達しようと努力しているんだよ。ヴェーダーンタ哲学の信奉者でね、ただ、ただ、ブラフマンは真実、この世界は虚構うつそ、とばかり決めつけている——大そう難しい道なんだ。この世界がウソならお前さんもウソ、そういうったその人もウソ、その人の話も夢物語りだ。とてもとても、大抵の人にはついていけないことだ。

どういうことかわかるかね？ 樟脳しょうのうを燃やせば何も残らないようなものだ。木を燃やしたら何がしかの灰は残る。最後の分別のあとで三昧に入ったときは、私わたしも、お前おまえも、この世界このよのことも、一切合切消えてなくなる」

〔学者パドマローチャンやヴィディヤサーガルとの出会い〕

「パドマローチャンは大へんな智者だったが、わたしが、大実母マ、大実母マと言っている、それは尊敬してくれたよ。パドマローチャンはポルドワン藩王のお抱え学者だった。カルカッタに出てきてカマルハテイの近くにある別荘に住んでいた。わたしはこの学者に会いたいと思ってね、先ずフリダイをやって高慢な人かどうか調べさせた。高慢な威張った学者じゃないと聞いたから、わたしは会ったよ。あれほど智慧が深くて学者なのに、わたしがラームプラサード(ベンガルの詩人)の歌をうたうと、聞きながら泣いているんだよ！ 人と話をして、こんなに満足な気持ちになったことはなかった。彼はわたしにこう言った。『信者といっしょにいたい、という欲をお捨てなさい。そうでないと、ありと

あらゆる種類の人間がやってきて、あなたを墮落させますよ」と。ヴァイシュナヴァ・チャランの師匠のウツサヴァーナンダと手紙で議論し合っていたが、わたしにまた、『まあ、お聞き下さい』と、こんな話をした——ある会合で論争が起こった。シヴァが偉大か、ブラマーの方が偉大かということ。最後にバラモンの学者たちはパドマローチャンの意見を聞いた。パドマローチャンは、いともアッサリとこう答えた。『十四代前の祖先から私まで、シヴァを見たこともないし、ブラマーも見ることがありませんので——』と。わたしが女と金を捨離しているときいて、ある日、こんなことを言った。『そういうものをなぜ捨てるのですか？ これは金だ、これは土だと区別する感覚は、無智から生じるのです』と。わたしは何と答えたらいだろう——『何もわからないけれど、ただ、わたしは金のようなものに関心がないんだ』と言っておいたよ」

〔ヴィディヤサーガルの慈善——だが奥の黄金は隠れている〕

「とても高慢な学者がいてね、神様の色形すがたを認めないのだ。だが、神様の行動や意図が誰に分かるかね？ そうしたらあの御方は、学者の前に根元造化力アディヤシャクティのかたちで現れて下さった。その学者は長いこと気絶していた。わずかに気が付いたら、カ！ カ！ カ！（カーリーのこと）としか発音することができなかつた」

一信者「ヴィディヤサーガルにお会いになって、どうお感じになりましたか？」

聖ラーマクリシュナ「ヴィディヤサーガルは学識もあるし慈悲心もあるが、洞察力がないね。自分

の奥の方に黄金が隠れているのだが、もし彼がその黄金を見つけていたら、あんなに外の仕事をたくさんしないで、もっと少なくなるはずだし、最後にはみんな捨てるはずだよ。自分の奥深く、胸のうちに神様がいらつしやるのだ、ということがよくわかったら、その御方を想ったり瞑想したりする方に心が向いてく筈なんだ。人によつては、無私の仕事(ニシユカマ・カルマ)を長いことやっていて、最後に離欲ウツライキギの心境になつて、今言つたように神様一辺倒になるものだが――。

イーシユワラ・ヴィディヤサーガルがああいう仕事をしているのは、大そう良いことだ。慈善は大そういいことなんだよ。慈悲ダヤと愛着マヤとは大違いで、慈悲ダヤはいいが愛着マヤはよくない。愛着マヤというのは、自分の身内に対する愛情――妻や子、兄弟姉妹、姪、甥、両親に対する愛情だ。慈悲ダヤというのは生きとし生けるもの、みんなに対する愛情だ」

サツチダーナンダは三性トリグナを超えている (サンスクリット)

ブラフマンは三性トリグナを超越し、口で説明できない

校長「慈悲ダヤも一つの束縛ではないでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「そりゃあ、とても深遠な話だよ。慈悲ダヤはサツトヴァ性から出てくるものだ。サツトヴァ性は支え育てる、ラジャス性は作る、タマス性は壊す。だが、ブラフマンは三つの性グナを超えている。自然現象ブラクリティを超えている。

真理（ブラフマン）の在る領域あには、三性トリグナはとどかないのだ。盗人が正当な場所に顔を出せないのと同じさ。捕まるのが恐いからね。サットヴァ、ラジャス、タマスの三性も盗人なんだ。まあ一つ話をお聞き——。

一人の男が森の道を歩いていた。三人の追いはぎが襲いかかってその人をつかまえた。そいつらは持ち物を全部奪い取った。盗賊が一人、この男をこのまま放っておく手はないな、と言って刀で殺そうとした。するともう一人の盗賊が、殺したって仕様がな、手足を縛ってここにおいていこう、と言ってその人の手足を縛ってそこに放り出し、三人して行ってしまった。しばらくすると別の一人が舞い戻ってきて、こう言った。『アー、お前、ひどい目に遭ったな。さあ、おれが縄をほどいてやる』そして、縄をといてからまた言った。『おれに従したがってこい、ちゃんとした道に案内してやるから』しばらく歩いて街道に出ると、『この道を行きな、お前の家に帰れるよ』男は感激して、『旦那さん、大そう親切にしてくださいありがとうございます。どうかお前さまも、私の家に来て下さいまし』と誘うと、盗賊は言った。『いや、おれはそっちの方にはどうしても行けないんだ。お巡りに捕まるから——』

この世こそ、森だ。この森に、サットヴァ、ラジャス、タマスという三人の盗賊がいて、人間から真理の知識を奪い取る。タマス性は人間を破壊させようとする。ラジャス性は人間をこの世に縛りつける。そしてサットヴァ性がタマスとラジャスから救い出す。サットヴァ性の保護によって、色欲、怒りといったタマス性を防ぐことが出来る。その上、この世の縄をゆるめてくれる。だが、サットヴァ

一信者「先生、すると、シユカデーヴァはブラフマン智に達しなかったのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「人の話によると、シユカデーヴァはブラフマンの大海を眺めて、ちよつと水におさわりになっただけで、中にはお入りにならなかったそうだよ。だから戻ってきて、たくさんのお教を皆にお示しになった。人々は、あの方はブラフマン智に達してから、人間を導くために戻っていらつしやつたのだと言っている。パリークシット王に^{パルカシッタ}聖典を読んでやらなけりやならなかつたし、それに大ぜいの人間を導く役目があったから、神様は、あの方の私^{ワタシ}をすっかり消しておしまいにならなかつたのさ。知識の私^{ワタシ}だけ残しておおきになったのだ」

〔ケーシャブへの教訓のこと——宗派団体はよくない〕

一信者「ブラフマン智を獲ましたら、宗派や団体に対する考え方はどうなりましようか？」

聖ラーマクリシュナ「ケーシャブ・センとブラフマン智について話をしたことがあった。ケーシャブ

（訳註 1）ジャダ・バラタ——全てを放棄した聖者であったが、一つだけ、鹿^カに愛着を持っており、亡くなる時に鹿のことを思つて死んだので、鹿として再生した。鹿としての生涯が終わつた後に、再び人間として再生する。このときには過去世の経験から何の執着も持たずに、^注傍からは、間抜け、バカと言われ、愚かなバラタ（ジャダ・バラタ）と呼ばれた。一八八四年十月二日「コタムリト」も併せて参照のこと。

（訳註 2）ダッタトレーヤー——偉大な聖仙^{リシ}アトリの妻、アナスレーヤーが、ブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神と等しいような子を願ひ苦行をして授かつた三神の化身とされる聖者。聖典『アヴァドゥータ・ギーター』を著した。

が、『もつと先を教えて下さい』と言ったから、わたしはこう答えた。『これ以上話すと、団体を維持していけなくなるよ』と。そして彼は、『ではもう結構です、先生』と言った(一同笑う)。

でもわたしは、ケーシャブに言ったよ。『私』と私のもの、これが無智だ。私がする、私の妻子、私の財産、私の名誉——こんなことは無知でなければ考えられないことだ』とね。すると彼が、『でも先生、私を捨ててしまつたら、あとには何も残りませんでしょう』と言うから、わたしはこう言つてきかせた。『ケーシャブさんよ、私をみんな捨ててしまえとは言わないよ。未熟な私を捨てろと言うのさ。私が為る、私の妻子、私は人を導く教師』というのがウヌボレで、未熟な私だ。これを捨てろと言うんだよ。そして、熟した私を残しておけ。つまり、私はあの御方の召使い。私はあの御方の信者。私はただの道具で、あの御方が使い手』

〔神の許可、命令を得てから宗教の宣布をすることが大切〕

一信者「熟した私で団体を維持していけるでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「ケーシャブ・センに言つてきかせたことだが——私は会長としてこの団体を取り仕切つて会員を導いている、などと、私は未熟な私だ。思想を広めるといふことは、それは難しいことだね、神様が承知してください。出来っこない。あの御方の許可が必要なんだよ。シユカデーヴァが聖典の講義をする許可をいただいたようにね。だから、もし神様にお会いして、命令なり許可なりを確かにいただいたら、その人は自分の得たものを宣伝してもいいし、人を

導いても差し支えない。その人の「私」は上等の私だから。

ケーシヤブにいつも言ってきたのは、「未熟な私」を捨てろということ。神の召使いの私や、神の信者の私なら、あつても一向に差し支えないんだよ。

『あなたは、協会だ、団体だ」といつも言っているが、あなたの会から人がぞろぞろ出て行くじゃないか』こう言ったらケーシヤブは、『先生、二、三年くらい私の会にいては、別の会に人が移ってしまふのです。しかも、出て行くときにはさんざ私の悪口を言つて——』とこぼす。わたしは言つてやった。『あなた、よく人の特徴を見極めなさいよ。誰でも彼でも見境いなく寄せ集めたつて、どうにもならんだろう?』と』

〔ケーシヤブへの教訓——根元造化力を認めよ〕

「それから、ケーシヤブにこういうことも話した——あなたは、根元造化力を認めなけりやいけないよ。ブラフマンと造化力は同じものだ。ブラフマンが、つまりはシヤクテイなのだ。人間が肉體意識をもっている間は、二つ(二元性——君・私、善・悪などの相對觀念)の感じがある。何か口で話せば、必ず二元的な説明になる、と。あとでケーシヤブはカーリー(シヤクテイ)を認めるようになったよ。

ある日のこと、ケーシヤブは弟子たちを連れて此処へ来た。わたしは、あなたの講義が聞きたい、と言つたら、チャドニー(屋根付きテラス)に皆で坐つて、講義を始めてくれた。そのあとで沐浴場のところへ行つて、坐つていろいろ話をしたよ。わたしが、『至誠そのものが、信者となつて現れたり、

聖典となつて現れたりしている。だから皆で、^{バーガヴァタ}、バクト、バガヴァン^グと称えよう」と。ケーシャブがその通り称えると、弟子たちも皆いつしよになつて、^{バーガヴァタ}、バクト、バガヴァン^グと声をそろえて称えた。つづけて、『こんどは^ググル、クリシュナ、ヴァイシュナヴァ(ヴィシュヌ派信者^グ)と称えよう』と言つたら、ケーシャブは、『先生、今はそこまではいけません。そんなことをしたら、ケーシャブはやはり伝統派なんだ、と人に言われます』と言つたよ」

〔昔話——聖ラーマクリシュナ、マヤーを見て気絶しそうになる〕

「三つの性質^グを超えることはとても難しい。神さまをつかまえないけりや、これは出来ないことだ。人間はマヤーの領域に住んでいる。このマヤーが神様のことをわからなくさせているのだよ。このマヤーが人間を無智にして放つておく。フリダイがいつか、仔牛を一匹ここへ連れてきた。ある日のこと、そいつが庭につながれているのを見た。草を食べさせるためだろう。わたしはフリダイに、『フリダイ、あれを何故、毎日あそこにつないでおくんだえ?』と聞いたら、フリダイは、『叔父さん、こいつを郷里^クに送ろうと思うんですよ、大きくなったら鋤^スをつけるつもりです』と言つた。この言葉聞いて、わたしは啞然^{アゼン}となつてしまった。そして、心のなかで思つたものだ——何というキリのないマヤーの戯れ^{たむ}! カルカッタからカマルブル、シオル、この仔牛は歩いて行くのか、あの遠い道を! 着いたらまたすぐ鋤^スを牽^ヒくのか——これが浮世というものなんだ——これこそマヤーというものだ!

かなり経ってから、やっと人心地ついたよ」

タクルールの三昧境

聖ラーマクリシュナは、ずっと三昧に入っておられる！一日がどうやって過ぎていくのかさえ、分からなかった。ただ信者たちを相手に、時々神様の話をなさるか、讚神歌を口ずさまれるだけである。午後三、四時ごろ、校長がきてみると、タクルールは小寝台の上で、まだ恍惚とされたご様子で坐っておられた。そして、しばらくすると、大実母と話をはじめられた。

大実母との会話中にこんなことをおっしゃる——「マー、あれに、どうして一粒やった？」そして、しばらく黙っておられたが、また——「マー、わかったよ、それだけで十分なんだね。一粒であんたの仕事ができる——人を導くことができる」

タクルールは、自分に従う者たちにこのようにして力を注入していらつしやるのだろうか？後に彼らが人々の導師となるための準備をしていらつしやるのだろうか？校長のほかにラカールも部屋に坐っていた。タクルールはまだ、恍惚としたご様子でいらつしやる。そして、ラカールにこんなことをおっしゃる——「お前、怒っていただろう？なぜお前を怒らせたか、これには理由があるんだ。薬は丁度いい時期に飲ませるだろう？オデキが膿んで口が開いてから、医者薬をあてがうものだ」またしばらくしてから、——「ハズラーは乾いた木（無味乾燥、味も素っ気もない）みたいに、パサパサしたやつだ！なのに、どうしてここにいるんだろう？それには理由があるんだ。ジャティラヤクティ

ラのような悶着屋もんぢやくがいると芝居が面白くなるんだ」

それから校長に向かつて——「神様のいろんなお姿を認めなけりゃいけないよ！ ジャガッド・ダートリーの姿はどういう意味かわかるか？ あの御方は宇宙を支えていらつしやるのだ。あの御方が支えなけりゃ、あの御方が世話しなけりゃ、世界は壊れてしまう、なくなつてしまふ。象のごとき心を支配できる人の胸のなかに、大実母マ、ジャガッド・ダートリーは現れて下さる」(訳註、ジャガッド・ダートリー——宇宙の支えの意、大実母の名の一つ、象を征服している獅子うしに乗っているマの姿)

ラカール「心は氣違い象です」

聖ラーマクリシユナ「シンハヴァアーヒニー(獅子に乗る女ドウルガー)の獅子シンハが、だからその象を従わせているのさ」

夕暮れて、各神殿の献灯アヒライがはじまった。夕拝の時刻には、タクール、聖ラーマクリシユナは自室で神の名をお称えになつた。部屋には練り香が焚かれている。タクールは手を合わせて小寝台の上に坐つて大実母マを想つていらつしやる。ベルゴル(ベルガリヤ)のゴーヴィンダ・ムクルジェー氏とその友人たちが入つてきて、ごあいさつしてから床の敷物に坐つた。校長も坐つていた。ラカールも坐つていた。外には月が昇り、世界は静かに微笑んでいるかのようだ。部屋のなかでも、皆は静かに沈黙して坐つたまま、タクールの平和なお姿を仰いでいる。タクールは前三昧状態——しばらくしてお話をなさつたが、まだ恍惚としていらつしやる。

〔シャーマの色——プルシヤとブラクリティ——ヨーガ・マヤー——シヴァ・カーリーと〕
ラーダー・クリシュナの形の説明——上信の人——分別の道

聖ラーマクリシュナ（「恍惚とされて」言ってみる、お前たちの疑問を。わたしが皆、解決してあげるよ）

ゴーヴィンダほか信者たちは、じつと考えていた。

ゴーヴィンダ「では、お聞きいたします。シャーマの肌は、なぜあんな色をしているのでございませぬか？」

聖ラーマクリシュナ「それは、遠いからだよ。近くに行けばどんな色でもない。大きな湖の水は遠くから見ると黒く見えるが、そばに行つてすくつて見れば何色でもない。空は遠くから見ると青い色だ。近づいてみると何色でもない。神の近くに行けば行くほど、名前も形相かたちもないことがよくわかる。ちよつと遠ざかつて眺めると、私の大実母、シャーママで、牧草の花のような碧あおい色だ。シャーマはプルシヤ（男性原理）かブラクリティ（女性原理）か？ ある信者が礼拝プージャをしていた。友だちがお参りに来てみると、シャーマの神像のくびに聖糸（男子だけがかけるもの）をかけてあるんだよ！ 友だちが、『あんな、大実母の首に聖糸をかけたらしいのかい？』ときくと、その信者は答えた——『あんたは、大実母のことをよく知っているようだね！ 私はまだよく知らないんだよ、あの御方が男なのか女なのか！ だから、とにかく聖糸をおかけしておいたんだ』と。

シャーマであるあの御方が、ブラフマンなのだ。形や色のないあの御方が、形や色に化なつている。

性質のない(ニルケナ)御方が、すべての性質(サクナ)になっている。ブラフマン即シャクティ、シャクティ即ブラフマン。不異だ。サツチダーナンダ(大実在)の陰陽両面なのだ」

「ゴーヴィンダ「なぜ、ヨーガ・マヤーというのでございますか？」」

聖ラーマクリシュナ「ヨーガ・マヤーというのは、つまり、プルシャ(男性原理)とブラクリティ(女性原理)の合一だ。見えるものはすべて、プルシャ―ブラクリティの合一だ。シヴァ・カーリーの像では、シヴァの体の上にカーリーが立っていらつしやる。シヴァは死骸みたいに横になっていらつしやる。カーリーはシヴァの方に目を向けていらつしやる。これはみんな、プルシャとブラクリティの合一を表わしている。プルシャは活動しないから、シヴァが死骸のようになっていらつしやるのだよ。プルシャとつながっていることで、ブラクリティはあらゆる仕事をなさる。創造と維持と破壊をなさるんだよ！」

ラーダー・クリシュナの対の神像も同じ意味だ。その合一のためにお互いの方に向かって曲っている。合一を表すために、聖クリシュナの鼻には真珠、聖ラーダーの鼻には青い玉がつけてある。聖ラーダーの肌は真珠のように薄黄色に輝いている。聖クリシュナの肌は碧だから、ラーダーは鼻に青い玉をつけているのだ。そのうえ、聖クリシュナの衣装は黄色、聖ラーダーは碧色の衣装だ。

上信の人とは？ ブラフマン智を得たあとで、あの御方が宇宙世界、人間、動物、二十四の存在原理になっていらつしやるのだ、と観ている人のことだよ。はじめのうちは、これではない、これでもない(ネーティ、ネーティ)と分別して進んで屋根の上に昇るんだ。そうすると、屋根も階段の材料と

同じレンガや石灰で出来ているということがわかる。そのとき、世界と生き物になっていらつしやるのはブラフマンそのものだ、はつきり覚るんだよ。

ただ、分別分析ばかりしているなんて！ ベッ！ ベッ！ 役にも立たん」

タクルはほんとに、ツバをお吐きになった。

「なぜ分別ばかりして、味もソツケもない人間になるんだい？ 〃私とあんた〃がある間は、あの御方の蓮の御足に清い信仰を持っているのがいいんだよ。

（ゴーヴィンダに向かつて）わたしは時々、〃あんたがわたし、わたしがあんた〃と言うが、時には〃あんたがあんた〃になってしまふんだよ！ そのときは、〃わたし〃はどこを探しても見当らないんだ。

シヤクティが神の化身となるんだ。ある学説によると、ラーマもクリシュナも歓喜と至高意識の大海の二つの波なんだそうだよ。

不二元アドヴァイタの智識に達したならば靈意識チャイタニヤを得る。すると、ありとあらゆる生物のなかに、靈意識チャイタニヤとしてあの御方がいらつしやることのはつきりわかるんだよ。靈意識チャイタニヤを得たあととは、至福の喜びだ。

不二元アドヴァイタ——靈意識チャイタニヤ——永遠の喜びだ」

〔神の姿はある——この世の快樂への欲望がなくなれば神への熱愛アヌラーガが表れる〕

聖ラーマクリシュナ、校長に向かつてお話しになる——

「それから、お前に言っておくが——形、つまり神様のいろいろな形を疑うなよ！ 形のある神様を

信じる！ それから、その形のなかで一番好きな形を冥想しろ」

次にゴーヴィンダに向かつて――

「分かっているか、この世の快樂に気がある間は、神さまに会いたくて命がけになることはできないよ。子供がオモチャで遊んでいるときは、もう夢中で遊んでいる。お菓子(サンデシユ)をやっても一口かじるだけ。オモチャにもお菓子にも飽きた時には、お母ちゃんのところに行く！」と言う。もうお菓子にも見向かない。知らない人が、お母さんのところへ連れてってあげよう」と言つてさえ、いっしょに付いて行くだろう。母親のところへ連れていってくれる人なら、誰とでもいっしょに行くだろう。(訳

註、サンデシユ――ミルクとさとうで固めた乳菓)

この世の苦樂を通り抜けたら、その時は神様が懐かしくて命がけになるよ。どうやったらそばに行けるか、そのことばかり考えるようになるよ。神様の話なら、誰のでも聴きにいくよ」

校長は心の中でくりかえす――「この世の苦樂を通り抜けたら、神を想つて命がけになる」